

フィラデルフィア留学記

林 義一

2001年6月からアメリカ東部、フィラデルフィアで2年7ヶ月間脊椎損傷に関する研究をさせていただきました。服部敏先生、柴山元英先生、高橋浩成先生、柴田正人先生が、以前に留学されており、私で5人目の留学となります。今まで留学された先生方のおかげで、始めから非常に暖かく研究室へ迎えてもらえました。Drexel university college of medicineの神経生物学、解剖学教室にポスドクとして所属したのですが、3年おきに大学が売買されているようで、大学の名前がここ10年で数度変わっています。

私のアメリカでの生活ですが、妻の出産と重なったため、最初の1年間は、単身赴任でした。留学前は、どんなバラ色の生活になるのだろうかと思っていたのですが、まず第1に慣れない研究、ワールドトレードセンター爆破とその後の戦争、炭疽菌事件、寒い寒いフィラデルフィアの冬、通じない英語、おい

しくない食事等のために、精神的に大変な1年間でした。その間、いろいろな人にお世話になったのですが、特に Marion Murray 教授は、自宅に呼んで食事をごちそう下さったり、ジョギング（私の場合は散歩）やジムを勧めて下さったりと助けて下さいました。妻と息子2人、家族4人での生活が翌年から、始まりました。何事にも慎重な私の妻は、アメリカ行きをしぶっていたのですが、日本人に比べるとアメリカ人は、子供や女性に大変親切で、すぐにアメリカが好きになりました。研究室では、アメリカ人だけでなく、フランス、中国、ロシア、韓国、イスラエル、カナダ等、様々な国からのメンバーと仕事をしていきます。研究室の仲間とは、お互いの引っ越しを手伝ったり、ホームパーティーを楽しんだり家族ぐるみの交流があります。パーティーでは、みんなが1品ずつ料理を持ち寄り、誰かの家に集合します。一応、集合時間

はあるのですが、時間通りに行く私達は、いつも1番乗りです。夕方5時集合でも、夜10時過ぎに来る人がいます。来るのも帰るのも、ばらばらです。無理に酒を勧めるようなこともありません。また、日曜日には Church に行ったりもしました。Church 主催のイースターエッグハント、ハロウィーン、クリスマス等現地のコミュニティーにも参加しました。

最後に、研究について述べさせていただきます。留学先のラボは、新しい脊椎損傷の治療として細胞移植、drug study 等を、ラットの脊損モデルを使い研究しています。私の研究ですが、Marion Murray 教授、Kenny Simansky 教授、Alan Tessler 教授の指導のもと、drug study を行いました。顕微鏡下の手術で脊損ラットを作るのですが、実は、ケアーの方が大変です。急性期は排尿のため毎日膀胱を押してやる必要があります。また、

知覚障害のため自分の体を食べるという恐ろしいこともおこります。研究の成果ですが、セロトニン直接作用薬投与にて慢性期完全麻痺モデルでの下肢機能改善が認められ、セロトニン前駆体投与で慢性期不全麻痺モデルでの機能改善が認められるという興味深い現象が見られました。また、免疫抑制剤の急性期投与で神経保護作用と神経再生作用が認められました。

こちらに留学し、様々な国からの人達と交流でき、異なる文化に触れて、今までとは違った視点で物事が見えるようになったのではと思っています。

最後になりましたが、医局の人手がない時期にもかかわらず、このような留学の機会を与えて頂き、松井宣夫名誉教授、大塚隆信教授をはじめ医局員の皆様方、同門の先生方に厚く御礼申し上げます。

